

【優秀賞】愛媛オレンジバイキングス賞

「誰もが暮らしやすい社会に」

今治市立菊間中学校 1年 坂本 庵

僕は、中学生になって、ソフトテニスを始めました。練習のためによく利用するテニスコートがあります。人工のクレイコートがたくさんあり、とても立派で、素晴らしい施設です。総合管理事務所には、車イスが通れそうなスロープ、車イストイレが設置されているようでした。「身体障害者手帳」「療育手帳」「精神障害者保健福祉手帳」を持っている方が運動のために利用する場合は、減額するという記載がされています。

僕は、ここで車イスの人が利用している場面や、利用している人を応援している場面を一度も見かけたことがありません。車イスの人が利用したり、応援したりするのは少し難しく感じました。利用するためには、階段があります。一段でも車イスの場合は大変です。応援する場合は、内側から入ると段差なく入れそうでしたが、応援するには不便そうに思いました。よく見回すとコートを利用する際、いつも閉まっているけど、直接入れそうな扉を発見しました。もしかすると、ここを利用するとコートに段差なく直接入れるのかもしれませんが。総合管理事務所内にある車イス用のトイレは、利用していると遠く感じると思います。僕は、減額の記載などはしているけれど、実際利用することを想定していないのではないかと思いました。

このようなスポーツ施設は、様々な人が利用できる場所です。年齢、性別、障がい、国籍、肌の色、言語の違いなどに左右されることなく誰もがスポーツを楽しみ、ふれあい、成長できる場所になればいいと思います。誰もが平等にスポーツを楽しみ、人生を豊かにする場所になれば、ここがもっと素敵な所になるように感じました。

「車イス」が、僕の中で、気になり始めたのには理由があります。僕の亡くなった曾祖母は、病気で車イスを利用していました。僕が生まれた時には車イスを利用していました。車イスが乗せられる車を利用し、いつも移動やトイレなどには、付き添いが必要でした。車イスが無理な場所は、あきらめて遠くから眺めるだけでした。とても不自由そうでしたが、曾祖父や家族が、一生懸命お世話をしている様子には、たくさんの優しさを感じました。僕には、時々しか会うことのない、曾祖父、曾祖母でした。

最近、僕の町で車イスを利用して生活している人に出会いました。曾祖母よりも若く、子どももいる人でした。その人が、神社の下でにぎやかな声を聞きながら一人さみしく暗い中、上の方を見ている姿を目撃したのです。子ども達の様子が気になりながら、上がれないので待っていたのだと思います。

僕が「こんばんは」と挨拶をすると、「こんばんは」と返事をしてくれましたが、他に会話することはありませんでした。僕が帰る時も、まだおられました。が、「さようなら」と挨拶をただけでした。どのような言葉をかけたらいいか、僕は分かりませんでした。

僕が住んでいる町は田舎です。想像するだけで不便な場所がたくさん思い付きます。誰もが平等に住みやすい場所でなければなりません。いつ、誰が障がい者になるかは分かりません。今は、そうではなくても、明日は、分かりません。自分には関係ないとか、かわいそうな人とか、思うことなくみんなが住みやすい場所にしていくことが必要だと思います。障がい者の人の声を聞く、子どもの声を聞く、お年寄りの声を聞く、どうしても立場が弱くなってしまう人の声を聞いてほしいと思います。

また、僕の町にも外国の人を見かけるようになりました。この外国の人達からしても住みやすい場所になればいいなと思います。お互いに理解し合えるようになれば、とても素敵な交流や出会いになると思います。そのためには、やはり

知ることが大切です。また、日本語が分からない人のためにもわかるような工夫や仕組みが必要だと思います。

僕は、中学生になりソフトテニス地域クラブで始めて、新たな出会い、発見がありました。これからも様々な出会いがあるかもしれません。これから、障がい者や外国の方と出会った時は、今回考えたことを生かしていきたいです。一人一人顔や性格、身長、体重などが違うようにみんな違うのが当たり前です。

僕は、この作文を書きながら今度同じ場面になったら、車イスを利用している人に何と声を掛けようかと考えました。「子ども達、楽しそうだったよ。」「みんなと一緒に楽しめるようになるといいですね。」と声を掛けたいです。